中部学院大学・中部学院大学短期大学部　教育実践研究第３巻第２号（2018）145－149

学生アスリートの学修支援に関する一考察

柿 島 新 太 郎[1)]

A Study on Study Support for Student Athlete

Shintaro KAKISHIMA

スポーツ振興において大学スポーツに寄せられる期待は大きい。オリンピックをはじめとした国際大会でも学生アスリートの目覚ましい活躍が紙面を飾ることも度々ある。本学では硬式野球部やゴルフ部などの指定強化クラブが全国的な活躍を収めている。一方で学生アスリートが抱える課題についても議論がすすめられている。本稿では本学に在籍する学生アスリートを対象に、学修や学生生活全般に対してのインタビュー調査を行った。インタビューから学生アスリートの進路選択における主体性の低さ、クラブ内での特殊な環境などが明らかになった。本学では2017年にスポーツ健康科学部が開設された。今後増加するだろう学生アスリートに対して何らかの学修支援が重要となる。

１．はじめに

2020年のオリンピック・パラリンピック東京大会を控え、スポーツ庁を中心に様々なスポーツ振興施策が検討されている。スポーツ振興の根幹となるスポーツ基本法には、スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことはすべての人々の権利であること、地域の交流を促進し、地域一体感の醸成すること、そしてスポーツ選手の不断の努力は国民に誇りと喜び、夢と感動を与えてくれることなどが記されている。これまでの体育と同義に語られてきたスポーツが新しい価値や意義を持って生まれ変わりつつあることがわかる。

スポーツ庁はスポーツ振興政策のひとつとして「大学スポーツの振興に関する検討会議最終とりまとめ　～大学のスポーツの価値の向上に向けて～」を発表した。

この中で大学スポーツについての基本的な考え方として、以下の２点が掲げられている。

（基本的な考え方）

① 大学スポーツ振興の意義

② 大学スポーツ資源の潜在力を発揮するための方向性）

また大学スポーツ振興の課題として以下の７つが挙げられている。

（大学スポーツの課題）

① 大学トップ層の理解の醸成

② スポーツマネジメント人材育成・部局の設置

③ 大学スポーツ振興のための資金調達力の向上

④ スポーツ教育・研究の充実や小学校・中学校・高等学校等への学生派遣

⑤ 学生アスリートのデュアルキャリア支援

⑥ スポーツボランティアの育成

⑦ 大学のスポーツ資源を活用した地域貢献・地域活性化）及び大学横断的かつ競技横断的統括組織（日本版 NCAA）の在り方（理念、役割等）

このように包括的な大学スポーツ振興策が検討されている。これは大学スポーツが持つ優良な資源、学生アスリートや指導者などに大きな期待を寄せられているからに他ならない。

１）スポーツ健康科学部スポーツ健康科学科

例えば日本体育教育の先駆的存在である日本体育大学は、数多くのオリンピアンを在学期間に輩出している。体操の内村航平、白井健三などは直近の好例だろう。またチームスポーツでも大学生の存在は欠かせないものとなっている。バレーボール日本代表男子の石川祐希などは中央大学に在籍しつつ、日本代表に選出され、また海外リーグで期限付きではあるもののプレーするなど活躍を見せている。

本学においても学生アスリートの活躍は著しい。陸上部では在学４年間でインカレ大会４連覇、ユニバーシアード日本代表に選出される学生がいる。硬式野球部は毎年のようにドラフト候補選手が誕生し、日本代表選手も輩出している。各運動部においてトップレベルまたはそれに準ずるレベルの活動が実施されており、岐阜県のみならず東海圏、また全国のスポーツ振興の一翼を担っていることは間違いない。

２．本研究調査の目的

全国的に大学スポーツ振興への期待が高まる中で、課題も浮き彫りになってきた。そのひとつが学生アスリートの修学支援である。学生アスリートにとって20歳前後は身体的な成長と技能レベルが高まり、高い競技成績を期待できる時期といえる。しかし同時に最後の教育機関として、専門性の高い知識や技能を学ぶ期間でもある。学生アスリートは学生という身分が前提であるように学業を修めつつ、競技活動に取り組む、そのバランスが重要である。

全国大学体育連合が行った調査によればスポーツ推薦入学者、運動部学生への学修支援について約７割の大学・短大が必要であると感じていると回答している。本学では2017年にスポーツ健康科学部が開設され、より多くの学生アスリートの入学が予想される。本学の学生アスリートについて、何らかの学修支援を講じることはスポーツマネジメントにおいて欠かせない。

そこで本稿では現在活動している学生アスリートの学修や運動部での現状を把握し、今後の学修支援策についての示唆を得ることを目的とする。

３．方　　法

本学における学生アスリートの現状を把握するため、３名の学生Ａ、Ｂ、Ｃにインタビューを行った。インタビューは半構造化インタビューとし、以下の質問を設定した。またその他にも会話を中心として関連があると思われる事項についての質問も行った。

対象者は本学の運動部（強化指定部）に４年間所属し、継続的に活動している学生を選定した。

【設定した】質問項目

① 本学へ入学した動機やきっかけ

② どうして在籍の学部を選んだのか

③ クラブと学業への意欲について

【インタビュー日時】

2017年11月下旬

４．結果　本学における運動部ならびに学生アスリートの現状

インタビューは以下の通りである。重要と思われる部分をアンダーラインで示す。

表１　インタビュー記録

質問者：早速だけど、どうして中部学院大学を選んだの？（質問①）

Ａ：気が付いたらっていうのが正直なところです。本当は他の大学に行こうと思ってました。だけど悩んでいる間に決まりだよっていう雰囲気になって…そこからは断れなくて。[1]

Ｂ：自分もそんな感じです。他の大学か、ここか。で、悩んでたんですけど、高校の監督と仲の良い知人（社会人野球チームの監督）がとりあえずセレクションに行ってこいって。参加して、戻ってきたら、高校の監督から決まったよ、って言われて。[2]

Ｃ：自分最初は大学進学するつもりがなかったんです。でも高校最後の大会でもうちょっと野球やりたいなって。それでいくつかの大学が候補だったんですけど、同じ高校の先輩が行ってるから、（高校の監督から）セレクションに行ってこいって言われました。どうしようかな、と考えてたら、あとは面接を受けるだけ、と言われて断れなかったって感じです。[3]

質問者：学部については知ってた？（質問②）
A：県内の大学なので、学部自体は知ってました。人間福祉学部も選べるのも知ってたけど、単位が取りやすいって聞いたから[4]今の学部を選びました。
B：なんか、人間福祉？みたいなのと経営学部のどっちか、みたいに言われてどっちでも良かったから[5]経営にしました。
C：同じような感じです。どっちでも良いみたいな感じだったから[6]経営にしました。

質問者：大学ではどれくらいクラブに打ち込む意欲があったの？（質問③）
A：自分自身の怪我（中学校時代から）のこともあって、正直諦めてました。いろいろ治療もしてもらったけど全然良くならないし、大学でも出来ないだろうなって[7]。
B：あんまりやる気なかったけど、（１年生当時に在学していた）小学校からの先輩がいて、がんばれよ、って言ってくれた。それで一時はがんばろうって思ってやってたけど、あんまりやる気が続かなかった。[8]
C：軽くやれればいいや[9]、っていうくらいに思ってた程度です。練習もきつくないし、寮生活も結構自由があるって聞いてたので、まぁ大学生活で野球かじるくらいかなって。

質問者：１年生の修得単位があまり多くないけど、これはどうして？
A：ついつい二度寝してしまって…朝のバスに乗り遅れると絶対に遅刻しちゃうんで、それでもういいやって…[10]。

質問者：１年生の練習がきつい？２年生から楽になるとか。
B：そういうわけじゃないんです。別に１年でも２年でも練習のきつさは変わらないです。でも１年生の頃は夕飯も遅くなるんです。４年生が先に食事されてるんで[11]、それが終わってからってなると…。お風呂もそんな感じです。
C：普通に夕飯、お風呂、洗濯ってやってるんですけど、寝るのは深夜２時ぐらい[12]です。特に夜遊びとかしなくても、だいたいそんな感じです。
B：先輩たちとの付き合いもあったりします。４年生と話してたら寝るの遅くなったり[13]。でもそれが先輩たちとの楽しい思い出にもなっているし、ためになったっていうのもあるんですけど。

質問者：卒業に向けて、学業というか修得単位が危ないなって思ったのはいつごろ？
A：３年生に上がる頃、２年生が終わる頃にやばいと感じてました。２年生の時は17単位しか取ってなかったです。
B：自分らもそんな感じです。ちょっとやばいなって。１，２年でもっとちゃんと授業行ってたらって思います。

質問者：学部での勉強は面白いって感じた？（質問③）
A：ただ単位取るだけ[14]って感じでした。
B：経営学が役に立つように思えなかったです。まぁ自分が頭悪いんですけど、内容が難しくてなんにもわかりませんでした[15]。
C：経営学でこれが身に付いたっていうのは特にないです。

質問者：最後に、４年間を振り返って、クラブと学業、どれくらいの割合で過ごせた？
A：１年、２年は８：２でクラブ[16]に力入れてました。３年生からは10：0で出席です。
B：どっちにも力入れられんかったっていう感じです。
C：１年、２年は６：４でクラブ[17]、今は10：0で出席です。

得られたインタビューデータを以下のように整理し、カテゴライズを試みた。

表２　インタビュー内容のカテゴリー

No	カテゴリー	アンダーライン	口述内容
1	高校時の進路選択 （質問①）	1，2，3	「そこからは断れなくて」 「決まったよって言われて」 「断れなかったって感じです」
2	学部選択 （質問②）	4，5，6	「単位が取りやすいって聞いたから」 「どっちでも良かったから」 「どっちでも良いみたいな感じだったから」
3	クラブへの意欲 （質問③）	7，8，9	「大学でも出来ないだろうなって」 「あんまりやる気が続かなかった」 「軽くやれればいいや」
4	学修環境	10	「朝のバスに乗り遅れると絶対に遅刻しちゃうんで、それでもういいやって…」
5	クラブ内関係	11，12，13	「４年生が先に食事されてるんで」 「寝るのは深夜２時ぐらい」 「４年生と話してたら寝るのが遅くなったり」
6	授業への意欲	14，15	「ただ単位取るだけ」 「難しくてなんにもわかりませんでした」
7	クラブと学業の割合	16，17	「１年、２年は８：２でクラブ」 「１年、２年は６：４でクラブ」

５．考　　察

今回のインタビューから、学生アスリートが抱える課題や現状についての知見を得ることが出来た。

結果からまず考えられることは、学生自身の進路選択における主体性が低いということである。カテゴリー１、カテゴリー２において自らの意志で決定した、という印象は少ない。

Ａは他の大学への進学を希望していたが、進路について熟考する前に、高校の監督からもう進路が決定したと伝えられ、そのまま進学をしている。Ｂは高校の監督と監督の知人の両名からの強い推薦があり断れなくなっている。Ｃはかなり多くの選択肢があったということだが、在学している先輩や高校の監督から決定事項のように伝えられている。

学部選択においても慎重に検討しているとは言い難い。人間福祉学部と経営学部では卒業後の進路も大きく変わることが予想されるが、卒業後の進路ではなく在学中の単位取得が容易かどうか、ということで学部を選択している。

なぜこのように進路選択について主体性が低いのか。３名の卒業高校はかなりの競技レベルを有しており、クラブ活動のために県内のみならず、全国から生徒が集まる。こういった学生は高校入学時にも同様にスポーツ推薦で進路を選択している可能性がある。一般的に高校入試は学力を選考基準として行うものだが、スポーツ推薦の場合は競技力を選考基準されるものが多い。場合によっては競技力水準さえ満たしていれば、学力を問わないケースもある。

また今回のインタビューではないが、高校選択も監督が決定することが一般的であるということも聞かれた。ひとつの高校を提示されるケースや、複数

の高校を提示されるケースがあるが、いずれにしても高校選択の段階で自己決定する主体性が育っていない。

カテゴリー３や６をみるとクラブへの参加意欲や学修への意欲も高いとは言い難い。これはアスリートバーンアウト（以下バーンアウト）の可能性も考えられる。特にＡは中学生時代からの怪我の影響で満足にクラブ活動に取り組めていない。多くの関係者が治療にあたったが改善の傾向はみられなかったという。今回のインタビューではないが、参与観察の中で高校３年時に肩の違和感を覚え、それ以降ボールを投げる能力が大きく損なわれたということも聞かれた。一般的にバーンアウトはスポーツ活動への意欲低下が報告されるが、学修面への影響も否定できない。

一方でカテゴリー７では１年生、２年生ではクラブ活動に比重を置いていたとも述べている。クラブへの意欲が高くないにもかかわらず、実際の大学生活ではクラブに比重がかかっている。この点についてはより精緻な調査分析を重ねたい。

カテゴリー５ではクラブ内でのヒエラルキーについて語られている。運動部内での上下関係は規律、ルールを浸透させるうえで非常に重要なものである。本学の運動部において常軌を逸脱する程の上下関係は聞かれないが、上級生に配慮した生活を過ごすだけでも食事や就寝などの生活リズムが乱れてしまうことが考えられる。

カテゴリー４では学修の環境について述べられている。本学運動部が多く在籍する経営学部及びスポーツ健康科学部は１年、２年では各務原キャンパスを中心とした科目開講、３年、４年からは関キャンパスでの科目開講が中心となる。そのため短時間でのキャンパス間移動が難しく、１限、２限に別キャンパスで開講された科目は受講することは出来ない。このようにキャンパス毎に開講される現在のカリキュラムでは、履修が思うように進まないといえるだろう。

６．今後の課題

大学運動部へ寄せられる期待として学生自身の人間的な成長、人格形成、学生生活の充実などが挙げられる。また大学全体のブランドイメージの向上、学生教職員の愛校心の醸成、受験者数の増加など経営的な期待も寄せられている。本学でも運動部学生の活躍は大学ホームページや各種広報媒体で活用され、大学広報活動の一翼を担っているといえる。

しかし学生アスリートへの学修支援や学生生活支援については十分とは言い難い。学生アスリートは生活環境や身体的、心理的にも特殊な環境にあり、一般の学生とは違った支援が必要になる。

例えば早稲田大学では早稲田アスリートプログラム（以下 WAP）を2014年度より学生アスリートに提供している。WAP は「人格陶冶のための教育プログラム」と「修学支援プログラム」からなっている。「人格陶冶のための教育プログラム」ではアスリートとしての教養や、キャリア形成支援などが組まれており、優秀な競技力を収めるだけではなく、社会で活躍できる人材育成を目指していることがわかる。「修学支援プログラム」では標準年限で卒業できるようなサポートが実施されている。学業成績の共有、学習面のアドバイスを行うアカデミックアドバイザーの配置、また GPA 上位クラブや個人の褒章も行っている。

今回の調査では本学の学生アスリートが抱える課題について明らかとなった。学生アスリートはキャリア形成、学修、クラブ活動において、様々な悩みを抱えている可能性があることを教職員関係者は認識しなければならないだろう。本研究を予備調査として、学生アスリートの現状についてさらに調査研究をすすめたい。

引 用 文 献

全国大学体育連合（2015）スポーツ・クラブ統括組織と学修支援・キャリア支援に関する調査

スポーツ庁（2017）大学スポーツの振興に関する検討会議

栗山靖弘（2012）スポーツ特待生の進路形成－高校球児の事例を通して－, 社会学ジャーナル(30), 167-183

山下拓郎他（2017）大学運動部員における日常・競技ストレッサーがストレス反応に及ぼす影響, 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要26巻, 65-70